エマルのアッカド語の言語的特徴

Some Linguistic Features of Emar Akkadian

池 田 潤^{*}
IKEDA Jun

ABSTRACT This paper describes some linguistic features of Akkadian administrative texts written with certainty in the city of Emar, i. e. the texts bearing a name of one of the kings of Emar. Emar Akkadian had plural sources which are distinct chronologically and geographically. Thus the resulting linguistic system exhibits archaic/innovative and Babylonian/Assyrian traits side by side. Another salient feature of Emar Akkadian is simplification found in its writing system, morphology and syntax. Besides, a unique formation of *primae Alef Šiprus* as well as some unique syllabic/logographic values and lexical items are attested in Emar Akkadian.

1. はじめに

エマル（現代のメスケネ）はユーフラテス河中流域に位置する。この地域はシリア政府が1968年にタブカにおいてユーフラテス・ダム建設に着手したためにやがて水没する運命となり、各地で緊急発掘が行われた。メスケネ新市の発掘は J. Margueron の率いるフランス隊によって1972年から1976年にかけて行われ、数多くのアッカド語文書と若干のシュメール語・ヒッタイト語・フリ語文書が発見された。発掘の成果は Beyer 1982に報告されている。

フランス隊が掘り出したアッカド語とシュメール語の文書793点はすべて D. Arnaud によって公刊されている。⁽¹⁾その他に「エマル近郊」ないしは「ユーフラテス河中流域」出土とされるアッカド語文書が世界各地に点在することが知られており、筆者の知るかぎりそのうち200点がすでに発表されている。⁽²⁾これらのテキストの内容は行政司法文書（売買契約、判決、遺言など）、書簡、物品

* 関西外国語大学非常勤講師
Lecturer, Kansai Gaidai University

や人名のリスト、文学テキスト（神話、知恵文学など）、宗教文書（祭儀文書や占い文書）、語彙テキスト等の広いジャンルにおよぶ。また、これらのテキストによってカバーされる年代は紀元前1290～1180年頃と推定されている⁽³⁾。

これらのテキストがすべてエマルで書かれたかという点必ずしもそうではない。一般にある遺跡から出土した文書がすべてそこで書かれたものとはかぎらないからである。文学テキストや語彙テキストや祭儀テキストは別の場所で書かれた「原本」のコピーである可能性が高いし、書簡は発送したものの写し以外は出土地の外で書かれて出土地に送られたものと考えられる。また、当時のエマルがカルケミシュを通して間接的にヒッタイトの支配下に置かれていたため、行政司法文書の中にもヒッタイトないしはカルケミシュで書かれてエマルで保管されたものがあつたと考えうる。さらに、一般に考えられているようにエマルが「アシュタタの地」の首都であつたとすれば、エマルの支配下にあつた町で書かれた文書が首都に保管される場合もあつただろう。

これらの事情を考慮に入れると、エマル（とその近郊）出土のアッカド語をひとまとめにしたコーパスはエマルで書かれたアッカド語以外のいわば不純物を混在させたものとなってしまうことが分かる。このようなコーパスは均質性を欠いているため、言語の共時分析の対象としては不適当であるといわざるを得ない⁽⁴⁾。そこで、本論文では確実にエマルで書かれたアッカド語を「エマルのアッカド語」と定義し、具体的にはエマルの王の名を記した行政文書をコーパスとする⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

2. 混成語的成り立ち

エマルの書記たちはアッカド語を母（国）語としていたわけではなく、紀元前二千年期に古代中東世界の国際共通語の役割を果たしていたアッカド語を外（国）語として学び運用していたことになる。エマルの書記の教育がどこでなされたかは今後の課題となる問題であるが、彼らのアッカド語習得においてメソポタミアのアッカド語がターゲットとなっていたことに疑いの余地はない。ひとくちにメソポタミアのアッカド語と言っても、エマルの書記たちが触れた可能性のある方言だけでも古期アッカド語 (Old Akkadian)、古期バビロニア語 (Old Babylonian)、古期アッシリア語 (Old Assyrian)、中期バビロニア語 (Middle Babylonian)、中期アッシリア語 (Middle Assyrian) があり、

時代あるいは地域によるバリエーションが見られる。

これらのメソポタミア本土のアッカド語方言とアッカド語圏の周辺部に位置するエマルのアッカド語とを較べてみると、後者が同時代かそれ以前のメソポタミア本土のアッカド語方言のいくつかを切り張りしたような体系を有することが分かってくる。言い換えると、エマルのアッカド語は複数のメソポタミア本土のアッカド語方言に基づき、基になった方言のいずれとも同一ではない新しい言語体系をなしているのである。

一般に、ある言語圏の周辺部には中央部の言語の古い時代における特徴が残る場合が多い。これは中央で起こった新しい変化が周辺地域にまで到達するのに時間がかかるために起こる現象である。このことはエマルのアッカド語にも当てはまる。たとえば、以下のような古い方言の特徴がエマルのアッカド語には残っている。

- 1) 古期バビロニア語と古期アッシリア語までは [◌] と *AH* というふたつの音価が同じ文字で書き表されていたが、中期バビロニア語と中期アッシリア語においてはじめて [◌] 記号 (𐎶) と *AH* 記号 (𐎶𐎵) が区別されるようになった。エマルのアッカド語には同時代のメソポタミアで生じたこの区別はまだ到達して⁽⁷⁾いない。
- 2) エマルのアッカド語の字音表(シラバリー)も古い時代の特徴を残している。エマルのアッカド語では、古期アッカド語にしかない音価 *dú* (*TU* 記号)、古期バビロニア語にしかない音価 *ga₁₄*? (*KA* 記号)、*ti₇*? (*TE* 記号)、*tám* (*UD* 記号)、古期アッシリア語にしかない音価 *dá* (*TA* 記号)、*ni₇*? (*NIM* 記号) *šár* (*ZUR* 記号)、*tàm* (*DIM* 記号)、その他中期の方言にはない音価 *dì* (*TI* 記号)、*gu₅* (*KU* 記号)、*ša₁₀* (*SA* 記号)、*tù* (*DU* 記号)、*wa* (*PI* 記号) が使われている。
- 3) アッカド語には一般に「broken spelling」と呼ばれる子音と母音、母音と子音が接続してしまう断絶型の綴りが見られ、その多くは声門閉鎖音の存在(タイプ1)を示すが、形態素境界(タイプ2)や子音の重なり(タイプ3)を示す場合もある。古期アッカド語ではタイプ2の用法が確認されて⁽⁸⁾おり、古期バビロニア語では1と2のタイプ⁽⁹⁾、古期アッシリア語では1～3の全タイプが見られる⁽¹⁰⁾。しかし、中期方言になると broken spelling⁽¹¹⁾の用法は事実上タイプ1に限定されてしまう。エマルのアッカド語に

は 2 と 3 のタイプの broken spelling があることから、これらも古い特徴とみなすことができよう。⁽¹²⁾

- 4) 二重母音 *-iu-* の長母音 *-iū-* への縮合はメソポタミアでは古期バビロニア語末期までに完了していた。⁽¹³⁾したがって、*an-ni-um* (ASJ 12 7 : 35) という例を見るとエマルのアッカド語が *iu > ū* という音韻変化に関しては古期バビロニア語の段階に留まっていることが分かる。
- 5) 中期方言に見られる音韻変化 *-št- > -lt-* が起こっていない。
- 6) 中期バビロニア語に見られる母音の同化現象 *uṣarris > uṣerris* が起こっていない。
- 7) *awātu* 「ことば, ことがら」という単語は中期方言では母音間の *w* が *m* に変化したため *amātu* となるが、エマルでは *awātu* のままである。
- 8) 古い方言には *-i* で終わる construct 形が見られるが、⁽¹⁴⁾エマルのアッカド語にも *LÚ.MEŠ šī-bu-ti/tì X* 「X の長老たち」(AuOrS 1 1 : 7, 「8」; 9 : 19) や *šī-im-ti É-ti-šu* 「彼の家の運命」(AuOr 5 15 : 4 ; RA 77 2 : 4) というような例が残っている。
- 9) *anumma* 「今, ここ」(*passim*), *ašriš* 「そこに, そこへ」, (*passim*), *bāšītu* 「財産, 所有物」(RA 77 1 : 29 ; 2 : 14), *dūdu* 「やかん」(AuOr 5 15 : 7) *imittu* 「(槍の類)」(*Emar VI* 17 : 5) 等, メソポタミアでは古期バビロニア語でしか確認されていない単語が使われている。

しかしながら、同時にメソポタミアで起こった変化が全く周辺地域に到達しなかったわけではない。エマルのアッカド語では以下の新しい特徴が上で述べた古い特徴と共存している。

- 10) mimation の脱落は古期バビロニア語・古期アッシリア語の末期に始まり、⁽¹⁵⁾中期バビロニア語・中期アッシリア語では historical spelling や *+ma* と *+mi* がついた場合を別にすれば完全に消失している。⁽¹⁶⁾エマルのアッカド語における mimation は中期方言と同様 historical spelling や *+ma* と *+mi* がついた場合以外では消失している。
- 11) 古期バビロニア語では *primae Alef* 動詞の *G iparras* 形および *D iparras/ iprus* 形は、たとえば *i-ik-ka-al ~ i-ka-al* と書くのに対し、⁽¹⁷⁾中期バビロニア語では *ik-ka-al* と書く。⁽¹⁸⁾エマルのアッカド語において *i-ik-ka-al ~ i-ka-al* 型の綴りが見あたらないのも中期バビロニア語の影響と言えるかもしれない。

い。

- 12) *aš-bu-ú*「彼らは留まっている」(*Emar VI* 17 : 16) の例から語頭の *w* が中期方言と同じく脱落しているのが分かる。
- 14) 母音間の *w* が *m* に変化する中期バビロニア語シフトは *lamû* (<*lawû*, *il-mi*「それが包囲した」*ASJ* 12 7 : 30, *AuOrS* 1 9 : 22) という語彙素によって確認できる。
- 15) *ḫurādu*「(兵士の一種)」(*Emar VI* 42 : 14), *balītu*「(砂地?)」(*Emar VI* 137 : 22, 25, 26 ; 138 : 1) 等の古い時代のアッカド語には見られない単語が出てくる。

エマルのアッカド語は明らかにバビロニア方言をベースにしているが⁽¹⁹⁾、アッシリア方言の影響もある程度見られる。

- 16) 与格の代名詞語尾 *+šunūti* (バビロニア語では *+šunūši*⁽²⁰⁾)。
- 17) 3 人称女性複数斜格語尾 *+āte* (バビロニア語では *+āti*⁽²¹⁾)。
- 18) 動詞 *šalāu*「放り投げる」(バビロニア語では *nadû*⁽²²⁾)。

そのため、エマルのアッカド語はバビロニア語でもアッシリア語でもない新たな体系をなしている。

3. 文法の単純化

エマルのアッカド語のもうひとつの大きな特徴として文法の単純化を挙げることができる。言うまでもなく、これはエマルのアッカド語が書記たちの母(国)語でなかったことに起因している。20世紀の人間が国際的なコミュニケーションのために英語を学んで使用するように、エマルの書記たちは当時の古代中東世界の国際共通語であったアッカド語を外(国)語として習得し運用した。その結果、日本人が冠詞を落としたり3単現のsを無視して英語を運用することがあるように、エマルの書記もメソポタミアのアッカド語を彼らなりに単純化して使っていた。

ここで注意したいのは、ネイティブのアッカド語ではないからと言って軽視する必要はないということだ。一般にネイティブのことばは「正しく」ノンネイティブのことばは「正しくない」と思われているために、ノンネイティブのことばづかいがネイティブのそれと異なる場合、前者は別個の「言語体系」というよりは後者の「誤用」と見られがちである。しかし、第二言語習得について

W. Klein が次のように述べている通り、別な見方も可能である。

どんな言語変種も、いかに未発達のものであれ、変化しやすい成分を別にすると、ある固有の体系性を持つ。そのため、当該変種内におけるある一語ないしは一構造が持つはたらきは目標言語⁽²³⁾においてそれらに相当する語や構造のはたらきだけに由来することはない。(Klein 1986 : 29)

これに従い、我々はエマルのアッカド語が必ずしもメソポタミアのアッカド語のみに由来しない固有の言語体系を持つという立場をとり、本節と次節でメソポタミアのアッカド語に由来しない体系性を具体的に取りあげていく。

外(国)語を運用する際に起こる単純化にはその場限りの偶発的なものもあるが、それが定着してある特定の集団の中で体系をなしてくる場合もある。エマルのアッカド語において後者のタイプに属すると思われるものは次の通りである。

19) メソポタミアのアッカド語では *dannu* 「強い、厳しい」と *dannatu* 「飢饉、苦難」を表意文字で書く場合、前者は *KALA(.GA)* 後者は *MUNUS.KALA.GA* という区別がある。それに対して、エマルのアッカド語では *dannu* 「強い、厳しい」も *dannatu* 「飢饉、苦難」も *KALA(.GA)* と書かれる⁽²⁴⁾。これは、*KALA(.GA)* と *MUNUS.KALA.GA* を *KALA(.GA)* に一本化する単純化⁽²⁵⁾である。

20) *ŠU.I.MEŠ-tu* 「床屋たち」(*AuOrS* 1 86 : 26), *ši-bu-ti* 「長老たち」(*AuOrS* 1 1 : 7, 「8」; 5 : 35, 37), *ši-bu-ti* 「長老たち」(*AuOrS* 1 9 : 19), *ŠU.I.MEŠ-ti-šu-nu* 「彼らの床屋たち」(*AuOrS* 1 86 : 4, 10) 等の例から分かるように、メソポタミアのアッカド語では形容詞の複数形に付くはずの *+ūtu* と *+ūti* が名詞にも使われている。これは名詞と形容詞の区別を無視する単純化と考えることができる。

21) メソポタミアのアッカド語では、名詞に属格代名詞語尾が付くと *i* 以外の短母音の格語尾が脱落する (e.g. *šumu* + *šu* → *šumšu*) 現象があるが、エマルのアッカド語では一部の定型句を除いて短母音の格語尾が脱落しない⁽²⁶⁾。別のことばで言えば、エマルのアッカド語では属格代名詞語尾つきの *status constructus* が定型句を別にすると *status rectus* の活用をするということになる。また、名詞が修飾する場合、定型句を別にすると *X ša Y* 構造 (*X* も *Y* も *status rectus*) が *XY* 構造 (*X* は *status constructus*, *Y*

は *status rectus*) よりも圧倒的に多い。これらふたつの現象は, *status rectus* と *status constructus* を区別せず *status rectus* のみで間に合わせようとする単純化と言ってよいだろう。

22) バビロニア語では *a/ā* が同一語中の *e/ē* に同化するため⁽²⁷⁾, stative 3 人称女性単数の形態素に +*at* (語幹に *e/ē* がない場合)~+*et* (語幹に *e/ē* がある場合) というふたつの異形態が生じる。エマルのアッカド語では, 後者の期待される *šebēru* の stative 3 人称女性単数形が *še-eb-ra-at* 「それらは壊れている」 (*Emar VI* 256: 6) であるため, この異形態の交替が消失していることが分かる。これは, +*at*~+*et* という交替を起こす異形態を +*at* に一本化する単純化である。

23) メソポタミアのアッカド語には属格代名詞語尾 1 人称単数に +*ya* (母音の後)~+*ī* (子音の後) という異形態の交替がある。この背後には属格代名詞語尾が付くと *i* 以外の短母音の格語尾が脱落するため属格代名詞語尾の直前が子音になる (e.g. *šuma*+*šu*→*šumšu*) という現象があるが, 上の 21 で述べたようにエマルのアッカド語では一部の定型句を除いて短母音の格語尾が脱落しない。そのため +*ī* は使われず, 結果として +*ya*~+*ī* という交替を起こす異形態が +*ya* に一本化されている。

24) メソポタミアのアッカド語では, 3 人称女性単数の代名詞語尾は属格 (+*ša*) と対格 (+*ši*) で形が異なる。エマルのアッカド語では +*ša* は定型表現に二度現れるだけで⁽²⁸⁾, それ以外では属格にも常に +*ši* が使われる。つまり, +*ša*~+*ši* という異形態の交替を +*ši* に一本化する単純化が生じていることになる。

25) エマルのアッカド語では, 書記によって動詞の 3 人称女性形が *taprus* パターンをとる場合と *tiprus* パターンをとる場合があり⁽²⁹⁾, 一見したところ 3 人称女性形の接頭辞に *ta*+ と *ti*+ というふたつの異形態が存在するかのようである。これは, 言うまでもなく, *tiprus* パターンを *prus* という動詞の語幹に 3 人称女性の接頭辞 *ti*+ がついたものとみなした場合のことであるが, 別の見方も可能である。すなわち, *tiprus* パターンは *i*+*prus* という性に関しては無標で 3 人称だけを表す形に *t*+ という女性の接頭辞がついたものと考えられることもできる。この *t*+ を女性接頭辞, *i*+ を 3 人称接頭辞と捉えるシステムは分析的で効率のよい形態素区分と言う

ことができる。

- 26) メソポタミアのアッカド語における precative の形成はバビロニア語とアッシリア語で次のように異なる。表中の G と D は語幹， 1 と 3 は人称，男・女は性を表す。

	G 3 男	G 3 女	G 1	D 3 男	D 3 女	D 1
バビロニア語	<i>liprus</i>		<i>luprus</i>	<i>liparris</i>		<i>luparris</i>
アッシリア語	<i>liprus</i>	<i>lū taprus</i>	<i>laprus</i>	<i>luparris</i>	<i>lū tuparris</i>	<i>luparris</i>

エマルのアッカド語ではバビロニア式でもアッシリア式でもない新たな precative 形成法の萌芽が見える。*lu ú-ḫa-li-iq*「彼が根こそぎにするように」(ASJ 14 M: 26) という例は *lu* と *ú* を続けて読めばアッシリア式のように見え，*lu ú-na-ab-bi*「彼女が（霊を）呼び出すように」(Emar VI 185: 3') も *lu* と *ú* を続けて読み（動詞自体はバビロニア式の活用をしているが）precative の形成自体はアッシリア式だと説明することができないわけではない。しかし，*lu-ú ú-še-ḫi-iz-šu*「私は彼を結婚させる」(Emar VI 185: 22') という綴りは明らかに不自然であるため上の三例は *lū* を precative を表す独立小辞として用いることによって precative の形成を単純化する試みの現れと見ることができる。

4. エマルのアッカド語の特異性

第二節で扱った混成語的成り立ちも第三節で扱った文法の単純化もアッカド語圏の周辺地域でアッカド語を母語としない書記によって書かれたアッカド語に広く認められる現象である。このようなアッカド語を辺境アッカド語 (Peripheral Akkadian) と呼ぶなら，エマルのアッカド語はボガズキョイやウガリトやアムルなどのアッカド語と並んで辺境アッカド語のひとつのバリエーションとして位置づけられるべき言語体系である。そのため，エマルのアッカド語は数ある辺境アッカド語と多くの特徴を共有するが，エマルのアッカド語にしか見られない特徴もいくつか見つかった。

- 27) *prima* Alef の Š 語幹 *iprus* 形はメソポタミアのアッカド語では *ušaC₂iC₃* パターンをとる (C₂ と C₃ はそれぞれアレフに続く第二・第三語根を示す) が，*li-še-ḫi-iz*「彼ら¹が結婚する¹（ように）」(RA 77 1: 36)

および *ú-še-ḫi-iz-šu* 「私は彼を結婚させる」 (*Emar VI* 185 : 22') が示すように、エマルのアカド語では *ušēC₂iC₃* ⁽³¹⁾ パターンで形成される。

- 28) エマル独特の音価 : *gam** (*GÁN* 記号)。
- 29) エマル独特の (疑似) 表意文字 : *AH* 「兄弟」 (*passim*), *GIŠ.KIRI₆*, *NUMUN* 「種蒔き済みの耕作地?」 (*Emar VI* 137 : 6, 8, 10, 12, 17, 19, 58 ; 140 : 1, 10, 14, 17), *KI.KÁ* 「門のある場所」 (*AuOrS* 1 3 : 6 ; *JCS* 40 2 : 1, 8, 10, 「14」, 18), *MÍ.NITA* 「子供たち」 (*Emar VI* 256 : 8, 12), *RU.UP* 「幅」 (*passim*)。
- 30) エマル独特の単語 : *annû* 「かわり」 (*Emar VI* 8 : 34 ; 10 : 12 ; 159 : 9, この単語については Ikeda 1992 を参照), *arāšu* 「相続する」 (*Emar VI* 185 : 13' ; *RA* 77 2 : 42), *Bi-iQ-mi* 「?」 (*Emar VI* 2 : 2), *KI.eršetu* 「宅地?」 (*passim*, この単語については Huehnergard 1991 を参照), *ga-mu-rù* 「最終的合意?」 (*AuOrS* 1 55 : 23-28), *ḫablu* 「壊れた?」 (*ASJ* 12 7 : 13, 18), *ḫi-iD-ru* 「(建物の一種)」 (*Emar VI* 139 : 8), *ḫuḫinnu* 「通り」 (*passim*), *ḫu-ku* 「(パンの一種)」 (*Emar VI* 20 : 18), *ḫu-ur-ri* 「?」 (*Emar VI* 14 : 1), *ḫu-zu-ra-ni* 「?」 (*Emar VI* 144 : 1), *NA₄.KA-ab-ú* 「?」 (*Emar VI* 8 : 15 ; 9 : 14), *KI-Pa-ú* 「?」 (*AuOrS* 1 7 : 7 ; *Emar VI* 147 : 13), *ku-bu-da-e* 「所有物?」 (*AuOr* 5 15 : 13, 19, 25), *nikaru* 「他人」 (*Emar VI* 20 : 13, 31), *nubbû* 「(霊を) 呼び出す」 (*Emar VI* 185 : 3' ; *RA* 77 1 : 8 ; 2 : 12), *qa-aZ-ri* 「?」 (*Emar VI* 142 : 1), *LÚ.sà-ra-ri* 「見知らぬ者」 (*RA* 77 2 : 19), *sà-ar-ma-ú* 「(長さの単位)」 (*JCS* 40 2 : 2), *NA₄.sikanu* 「(石の一種)」 (*Emar VI* 17 : 39 ; 125 : 40), *ta¹-na-aḫ-la-ṭi¹* 「遺産?」 (*AuOrS* 1 35 : 10), *ta-ši-l[a³-ta³]* 「立派な?」 (*Emar VI* 42 : 3), *É tugguru* 「倉庫」 (*tu-ug-gu₅-rù Emar VI* 144 : 1, 8, 13, 15, 23, 29 ~ *tu₄-gu-ru¹ Emar VI* 138 : 26, 37, 40, 43, 45 ~ [*t*] *u-gu₅-rù Emar VI* 253 : 29), *ZI-IB-ḫi* 「?」 (*Emar VI* 2 : 10 ; 139 : 15)。

注

- (1) 第1巻と第2巻 (Arnaud 1985) には粘土板と断片が書き写してあり, 第3巻 (Arnaud 1986) 第4巻 (Arnaud 1988) には全文書のローマ字転写と翻訳が収めら

れている。第3巻の書評は Durand (1989, 1990) によって、また第4巻の語彙テキストの書評は Civil (1989) によって出されている。

- (2) Yoshikawa & Matsushima 1980, Sigrist 1982, Huehnergard 1983, Meyer & Wilhelm 1983, Arnaud 1984, Tsukimoto 1984, Arnaud 1987, Beckman 1988, Fales 1988, Tsukimoto 1988, Gonnet & Malbran-Labat 1989-90, Tsukimoto 1990, Tsukimoto 1991a, Tsukimoto 1991b, Arnaud 1991, Arnaud 1992, Dalley & Teissier 1992, Tsukimoto 1992a, Tsukimoto 1992b, Sigrist 1993.
- (3) 詳しくは山田1994を参照。
- (4) 同様の見解を有する最近のアッカド語文法に Huehnergard 1989 (7ページ参照) と Izre'el 1991 (I : 9-10ページ参照) がある。
- (5) エマル王家の系図については、山田1994の34ページを参照。
- (6) 断片的で言語資料に乏しいものを除いた以下の70点が「エマルのアッカド語」のコーパスである。
RA 77 1=Huehnergard 1983 : 13-17 (=Tsukimoto 1991 : 288-289), *RA 77 2*=Huehnergard 1983 : 17-19 (=Tsukimoto 1991 : 289), *Emar VI 1*=Arnaud 1986 : 7-8, *Emar VI 2*=Arnaud 1986 : 8-9, *Emar VI 3*=Arnaud 1986 : 9-10, *Emar VI 4*=Arnaud 1986 : 10-11, *Emar VI 8*=Arnaud 1986 : 15-16, *Emar VI 9*=Arnaud 1986 : 16-17, *Emar VI 10*=Arnaud 1986 : 18-19, *Emar VI 11*=Arnaud 1986 : 19-20, *Emar VI 14*=Arnaud 1986 : 22-23, *Emar VI 17*=Arnaud 1986 : 26-28, *Emar VI 20*=Arnaud 1986 : 31-32, *Emar VI 42*=Arnaud 1986 : 57-58, *Emar VI 94*=Arnaud 1986 : 106-108, *Emar VI 95*=Arnaud 1986 : 108, *Emar VI 97*=Arnaud 1986 : 109-110, *Emar VI 125*=Arnaud 1986 : 133-134, *Emar VI 126*=Arnaud 1986 : 134-135, *Emar VI 137*=Arnaud 1986 : 143-146, *Emar VI 138*=Arnaud 1986 : 146-149, *Emar VI 139*=Arnaud 1986 : 149-151, *Emar VI 140*=Arnaud 1986 : 151-152, *Emar VI 141*=Arnaud 1986 : 153-154, *Emar VI 142*=Arnaud 1986 : 154-155, *Emar VI 144*=Arnaud 1986 : 156-158, *Emar VI 146*=Arnaud 1986 : 158-160, *Emar VI 147*=Arnaud 1986 : 160-162, *Emar VI 156*=Arnaud 1986 : 172-173, *Emar VI 157*=Arnaud 1986 : 173, *Emar VI 158*=Arnaud 1986 : 174-175, *Emar VI 159*=Arnaud 1986 : 175-176, *Emar VI 180*=Arnaud 1986 : 193-194, *Emar VI 183*=Arnaud 1986 : 196, *Emar VI 185*=Arnaud 1986 : 197-198, *Emar VI 253*=Arnaud 1986 : 149-150, *Emar VI 256*=Arnaud 1986 : 151-153, *AuOr 5 15*=Arnaud 1987 : 235-237, *JCS 40 2*=Beckman 1988 : 65-67, (=Tsukimoto 1990 : 185), *ASJ 10 D*=Tsukimoto 1989 : 163-165, *ASJ 12 1*=Tsukimoto 1990 : 177-180, *ASJ 12 7*=Tsukimoto 1990 : 189-193, *ASJ 12 8*=Tsukimoto 1990 : 193-194, *ASJ 12 10*=Tsukimoto 1990 : 197-198, *ASJ 12 16*=Tsukimoto 1990 : 208-210, *AuOrS 1 1*=Arnaud 1991 : 22-23, *AuOrS 1 2*=Arnaud 1991 : 23-24, *AuOrS 1 3*=Arnaud 1991 : 25-26, *AuOrS 1 4*=Arnaud 1991 : 26-27, *AuOrS*

- I 5**=Arnaud 1991 : 27-29, **AuOrS I 6**=Arnaud 1991 : 29-30, **AuOrS I 7**=Arnaud 1991 : 31-32, **AuOrS I 8**=Arnaud 1991 : 32-33, **AuOrS I 9**=Arnaud 1991 : 33-35, **AuOrS I 10**=Arnaud 1991 : 36-37, **AuOrS I 11**=Arnaud 1991 : 37-38, **AuOrS I 12**=Arnaud 1991 : 39-40, **AuOrS I 13**=Arnaud 1991 : 40-41, **AuOrS I 35**=Arnaud 1991 : 69-70, **AuOrS I 47**=Arnaud 1991 : 87-88, **AuOrS I 54**=Arnaud 1991 : 97-98, **AuOrS I 55**=Arnaud 1991 : 99-100, **AuOrS I 59**=Arnaud 1991 : 104-105, **AuOrS I 60**=Arnaud 1991 : 105-106, **AuOrS I 62**=Arnaud 1991 : 107-108, **AuOrS I 82**=Arnaud 1991 : 135-136, **AuOrS I 86**=Arnaud 1991 : 141-142, **ASJ 14 M**=Tsukimoto 1992b, **Iraq 54 4**=Dalley & Teissier 1992 : 98-101, **Iraq 54 5**=Dalley & Teissier 1992 : 101-102。なお、1993年以降に入手可能となった Arnaud 1992 と Sigrist 1993 は本稿のデータに含まれていない。
- (7) エマルで出土していながらコーパスに入っていない文書、すなわち確実にエマルで書かれた証拠のない文書の中には⁹文字 **𐤀𐤍** と **AH** 文字 **𐤀𐤍** をはっきり区別しているものがある。
- (8) Gelb 1961 : 42。
- (9) GAG §7b, 23e。
- (10) Hecker 1968 : 31, 43, 46。
- (11) Aro 1955 : 20-21 および Mayer 1971 : 21 を参照。
- (12) *ad-din-aš-š[u]* 「私は彼に与えた」=*addin+aššu* (*Emar VI* 180 : 10), *id-in-šu* 「彼はそれを与えた」=*iddinšu* (*AuOrS I* 9 : 12)。
- (13) GAG § 16。
- (14) GAG § 64a, Aro 1955 : 66。
- (15) GAG § 63c, Hecker 1968 : 96。
- (16) Aro 1955 : 32, Mayer 1971 : 22。
- (17) GAG § 23d, 97c, Wilhelm 1971 : 285。
- (18) Aro 1955 : 26-31。
- (19) アッシリア方言の影響は目立たない。たとえば、縮合を起こしていない二重母音の例はあるが、特にアッシリア語の影響と考えるべきでないケースはほとんどない。アッシリア語に特徴的な母音調和はエマルのアッカド語では起こっていない。動詞の3人称女性単数形の接頭辞は *t-* で始まるが、これはむしろ西セム語の影響と言えよう。*šūt* と *šit* という独立人称代名詞はアッシリア語的ではあるが、同様の形が古期バビロニア語の古い方言にも見られる (Whiting 1987 : 9 参照)。
- (20) *i-ba-qa-ar-šu-nu-ti* 「彼が彼らに権を主張す利る」(*AuOrS* 186 : 15, 「18」), *iš-qí-šu-nu-ti* 「彼が彼らに(灌漑の権利を)与えた」(*AuOrS I* 86 : 30), *iš-tú-ur-šu-nu-ti* 「彼が彼らのために書いた」(*AuOrS I* 86 : 11)。Hecker 1968 : 77 参照。
- (21) *a-wa-te-e* 「ことば」(*ASJ 14 M*: 23)。Mayer 1971 : 48 および Izre'el 1991

I:112-120 参照。

- (22) *ša-al-ú*「彼らが放り出された」(*Emar VI* 256 : 9)。CAD S: 72 参照。
- (23) この引用の原文は次の通り。Any language variety, no matter how rudimentary, has apart from some variable components, a certain intrinsic *systematicity*. Thus the function of any one word or construction without the given variety cannot be derived solely from the function of the corresponding word or construction in the target language.
- (24) *dannu*「強い, 厳しい」—「*KALA*¹(*Emar VI* 144 : 10)~*KALA.GA* (*AuOrS* 1 13 : 9)~*KALA.GA*₁₄ (*ASJ* 12 7 : 9), *dannatu*「飢饉, 苦難」—*KALA-ti* (*AuOrS* 1 19 : 21)~*KALA* (*Emar VI* 20 : 14)~*KALA.GA* (*Emar VI* 138 : 11, 24, 41 ; 158 : 14)~*KAL.LA.GI* (*Emar VI* 139 : 42)。
- (25) メソポタミアのアッカド語で *NAM.KÚR* ないしは *MUNUS.KÚR* と書かれる *nukurtu*「敵意, 戦争」を *KÚR.MEŠ* (*Emar VI* 256 : 10)~*KÚR.KÚR* (*AuOrS* 1 9 : 21) と表記するのも同様の単純化と言えるだろう。
- (26) *a-bu-šu*「彼の父」(*AuOrS* 1 9 : 25), *AMA-ma-šu*「彼の母」(*RA* 77 1 : 15, 支えの母音 *-a-* が挿入されているという可能性もある), *AMA-mu-šu-nu*「彼らの母」(*RA* 77 1 : 24), *É-ta-šu*「彼の家」(*AuOrS* 1 82 : 25), *É-tu₄-ia*「私の家」(*AuOrS* 1 35 : 15 ; *RA* 77 1 : 28), *ŠĀ-bu-šu*「彼の心」(*AuOrS* 1 59 : 16 ; *JCS* 40 2 : 16), *ŠĀ-bu-šu-nu*「彼らの心」(*ASJ* 12 8 : 16 ; 10 : 14 ; *AuOrS* 1 11 : 23 ; 12 : 14 ; 60 : 13' ; 62 : 17 ; *Emar VI* 9 : 31 ; 94 : 17 ; 140 : 15 ; 141 : 「17」 ; 142 : 15), *šu-ma-šu*「彼の名前」(*ASJ* 12 7 : 48)。
- (27) GAG § 10a-b, Rainer 1966 : 83f. 参照。
- (28) *RU.UP-ša*「その幅」(*AuOrS* 1 4 : 3), *ru¹-pu-us-sà*「その幅」(*Emar VI* 3 : 12)。
- (29) Bēlu-malik と Mašru-ḥamis ともうひとりの匿名の書記。たとえば, *ta-al-lak*「彼女が行く」(*AuOr* 5 15 : 23), *[t]a-a[d-d]i-in-šu*「彼女がそれを売った」(*Emar VI* 20 : 32), *ta-aš-「li」*「彼女ら (!) が放り出す (ように)」(*AuOrS* 1 47 : 17), *ta-ad-di-na*「彼女らが与える (ように)」(*AuOrS* 1 47 : 19)。
- (30) Imlik-Dagan と Iš-Dagan ともうひとりの匿名の書記。たとえば, *ti-im-tù-ta*「彼女たちが死んだ (ら)」(*RA* 77 2 : 39), *「til-la¹-[k]a*「彼女が行く」(*RA* 77 1 : 25), *ti-il-la-ak*「彼女が行く」(*RA* 77 2 : 20), *ti-lik*「彼女が行く (ように)」(*RA* 77 2 : 24), *ti-im-tù-ut*「彼女が死んだ (ら)」(*Emar VI* 185 : 10', 21' ; *RA* 77 2 : 6) *ti-iš-ku-un*「彼女が置く (ように)」(*RA* 77 2 : 22)。
- (31) *gam_x¹-ri*「全 (額)」(*Emar VI* 9 : 29)。

引用文献

Arnaud, D. 1984

La Syrie du moyen-Euphrate sous le protectorat hittite: l'administration

- d'après trois lettres inédites. *Aula Orientalis* 2 : 179–188.
- Arnaud, D. 1985
Recherches au Pays d'Aštata-Emar VI. Tomes 1–2. Paris.
- Arnaud, D. 1986
Recherches au Pays d'Aštata-Emar VI. Tome 3. Paris.
- Arnaud, D. 1987
 La Syrie du moyen-Euphrate sous le protectorat hittite: contrats de droit privé. *Aula Orientalis* 5 : 211–241.
- Arnaud, D. 1988
Recherches au Pays d'Aštata-Emar VI. Tome 4. Paris.
- Arnaud, D. 1991
Textes Syriens de l'âge du bronze récent. *Aula Orientalis-Supplementa* 1. Barcelona.
- Arnaud, D. 1992
 Tablettes de genres divers du moyen-Euphrate. *Studi Micenei ed Egeo-Anatolici* 30 : 195–245.
- Aro, J. 1955
Studien zur mittelbabylonischen Grammatik. *Studia Orientalia* 20. Helsinki.
- Beckman, G. 1988
 Three Tablets from the Vicinity of Emar. *JCS* 40 : 61–68.
- Beyer, D. (ed). 1982
Meskéné-Emar: Dix ans de travaux 1972–1982. Paris.
- CAD.**
The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of Chicago. Chicago. 1956–
- Civil, M. 1989
 The Texts from Meskene-Emar. *Aula Orientalis* 7 : 5–25.
- Dalley S.; Teissier B. 1992
 Tablets from the vicinity of Emar and Elsewhere, *Iraq* 54 : 83–111 (+Plates X–XIV).
- Durand, J.-M. 1989
 Review of Arnaud 1985, 1986 and 1988. *RA* 83 : 163–191.
- Durand, J.-M. 1990
 Review of Arnaud 1985, 1986 and 1988. *RA* 84 : 49–85.
- Fales, F. M. 1988
Prima dell'alfabeto. *Studi e documenti* 4. Venezia.
- GAG**
 W. von Soden. *Grundriss der akkadischen Grammatik*. Roma. 1969.

Gelb, I. J. 1961

Old Akkadian Writing and Grammar. Second edition, revised and enlarged. Materials for the Assyrian Dictionary, 2. Chicago.

Gonnet, H.; Malbran-Labat, F. 1989–90

Un contrat akkadien avec sceau hittite: AO 28366. *Anatolica* 16 : 1–6.

Hecker, K. 1968

Grammatik der Kültepe-Texte. Analecta Orientalia 44. Roma.

Huehnergard, J. 1979

The Akkadian Dialects of Carchemish and Ugarit. PhD dissertation: Harvard University.

Huehnergard, J. 1983

Five Tablets from the Vicinity of Emar. *RA* 77 : 11–43.

Huehnergard, J. 1989

The Akkadian of Ugarit. Harvard Semitic Studies 34. Atlanta, Georgia.

Huehnergard, J. 1991

More on *KI.eršetu* at Emar. *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* 1991/2 : 39.

Ikeda, J. 1992

More attestations of ^eNĪ in Emar and Munbāqa. *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* 1992/4 : 82–83.

Izre'el, Sh. 1991

Amurru Akkadian: A Linguistic Study. With an Appendix on the History of Amurru by I. Singer. Volume I-II. Harvard Semitic Studies 40–41. Atlanta, Georgia.

Klein W. 1986

Second Language Aquisition. Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge.

Mayer, W. 1971

Untersuchungen zur Grammatik des Mittelassyrischen. AOATS 2. Kevelaer/Neukirchen-Vluyn.

Meyer, J.-W.; Wilhelm, G. 1983

Eine spätbronzezeitliche Keilschrifturkunde aus Syrien. *Damaszener Mitteilungen* 1 : 249–61 (plates pp. 58–59).

Reiner, E. 1966

A Linguistic Analysis of Akkadian. Janua Linguarum: Series Practica 21. The Hague.

Sigrist, M. 1982

Miscellanea. *JCS* 34 : 242–252.

Sigrist, M. 1993

Seven Emar Tablets. In: A. F. Rainey (ed.), *kinattūtu ša dārāti*: Raphael Kutscher Memorial Volume, Tel Aviv, 165–187.

Tsukimoto, A. 1984

Eine neue Urkunde des Tili-Šarruma, Sohn des Königs von Karkamiš. *ASJ* 6 : 65–74.

Tsukimoto, A. 1988

Sieben spätbronzezeitliche Urkunden aus Syrien. *ASJ* 10 : 153–189.

Tsukimoto, A. 1990

Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (I). *ASJ* 12 : 177–259.

Tsukimoto, A. 1991a

Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (II), *ASJ* 13 : 275–333.

Tsukimoto, A. 1991b

Six Texts from the Middle Euphrates Region. *ASJ* 13 : 335–345.

Tsukimoto, A. 1992a

Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (III). *ASJ* 14 : 289–310.

Tsukimoto, A. 1992b

An Akkadian Field Sale Document Privately Held in Tokyo. *ASJ* 14 : 311–315.

Whiting, R. M. Jr. 1987

Old Babylonian Letters from Tell Asmar. Assyriological Studies, 22. Chicago.

Wilhelm, G. 1971

Eine altbabylonische Graphik im Hurro-Akkadischen. *UF* 3 : 285–268.

山田雅道1994

「エマル文書の年代学序説——絶対年代と対照年代」『オリエント』37/1 : 17–34.

吉川守・松島英子1980

「東京大学東洋文化研究所所蔵の Bilingual Lexical Tablet」『オリエント』23/2 : 1–19.